

安政四年(一八五七年)、松浦武四郎は、内大部川について、当時の上川のアイヌの人たちのリーダーであったクウチンコロからの聞き書きを次のように記録した。

「ナイタイベー右の方川口中十間計、遅流也。源まで凡二百路も有るよし。其西岸の山々に樅木多し。扱川すじ少し上りて右の方、ワツカウエンナイタイへ、また少し上りてノホリコヤンナイタイへ、並びてシンマンナイタイへ、上りて左の方ヲロウエンベツ、右本川すじなり。此うしろはソラチの方に当るよし。源はホロイワ岳と云ふの落る。魚類鮭少しにて鱒・鮭・鮭多しと。クウチンコロ申口」(「再篤石狩日誌」)

掲載図は、松浦武四郎が作成した『東西蝦夷山川地理取調図』の内大部

断章 旭川のアイヌ語 地名研究

40

高橋 基



川から神居古潭の左岸と、エヌプト(現・伊野川河口)、チクヘツプト(現・忠別川河口)と、天番屋までの関連事項部分を載せたものである。

掲載図には、クウチンコロが述べた内大部川右岸のヲロウエンベツが脱落している。オロウエンベツ(Oro-wen-pet)その中が悪い・山は普通は岩などがごろごろして歩いて歩きにくい川をいう。この川は現称オ

—内大部川のアイヌ語名(下)—

ロエン川で、前回紹介した明治二十九年発行の『北海道実測切図』では滝の印が七個あり、現地調査でもこの通りで、アイヌ語地名は、現地の地形を表現しているという典型でもある。

また、掲載図では、内大部川の水源地の山は、ナイタイヘイトコ(nay-taipe-etok)内大部川の・水源)となっているが、クウチンコロは、「ホロイワ岳」としている。全道各

—内大部川のアイヌ語名(下)—

地のポロイワ(Poro-iwa)大・山)は、目立つ霊山的な山である。このポロイワ岳は、スキー場のある神居山(七九九)ではなく、空知郡との境界の神居山(八〇九)で、別称がカムイシシ(Kamuy-sir)神の・山)だったのであろう。

松浦武四郎は、上川・旭川調査のあと、空知川を丸木舟に乗り廻る。内大部川と水源を共にするホロナイ(現・パンケ幌内川)について、次のように記述している。

「ホロナイ左の方相成の川

也。川中凡十間も有るべし。此源より上川え山と有りと。(中略)また、カモイコタンの下え出るにもよろしき由聞き侍りけり。其山中石多しとかや。右は夕ヨトイ度々超えたる事有るよしなり聞けり」(「再篤石狩日誌」)

右は、現在の道道四号線の旭川芦別線に当たるルートで、松浦武四郎を案内して同行したシリアイヌは、帰途にここからナイタイベに山越し、旭川のポンヌムの家で五・六日休息して石狩に戻りたい旨を申し出、実行する。

さて、松浦武四郎は、蝦夷地経営上で最も重視したのが、新道開削のための踏査であった。その建言・報告書を安政六年に編集したのが、『燼心録赤』である。この中の「石狩サツポロ領ヲカハルシヨリチトセ通りユウバリ、ソラチの上川大番屋え新道見積り書」では、右のホロナイからナイタイベに山越えし、一里ほど下りイヌプト(伊野川)の上流へ出て、イヌプトを下り、チクベツプトの大番屋の後ろに出るルートを提唱している。

このように、内大部川は空知川筋との交通路の川として利用されていたことがわかる。アイヌ語地名研究会

※毎月第一週号に掲載します